

流行と書いて“りゅうこう”とも“はやり”とも読む。

「〇〇は、でなければいけない」「〇〇は、こうであるべき」「我々はこちらに向かって進まなければいけない・・・」
こういう言葉をよく言い又よく聞けけれども、こんな事にと簡単にいうが、それこそ愛もない日ごろの動作ものいいから、よくよく考え想い想像するような事まで、考え方想い方に、時代に由ってその処し方が違ってきて、今はこういうふうに言うけれども一昔前なら絶対にこういうふうには言わなかった、考えなかった、というような事がよくある。人々の意見がだいたい同じように一致することも多い、こんな事が流行のひとつなのかな。

先日の展覧会で書いた文章の中に「今回の展覧会は緑色の絵が多い、緑色の絵の具をたくさん使いました」と書いたが「これは何故だと申しますと、絵の具箱の中の緑色以外の色をそれぞれ色々使ってしまった、緑色の絵の具がたくさん余ったので、その余った緑色の絵の具を今回はたくさん使ったのですよ、と本当はこれは冗談なのですが・・・」
と前置きして、毎日毎日絵を描いて自分なりにその時々色の流行があり、赤い色の絵が多い時は赤い色の絵の時代が1年2年と続き、しばらくすると他の色、例えば黄色い絵、例えば青色の絵がまたまた続くという具合ですね。赤い絵の具を使って描いてみると絵が上手く収まった、気持ちのいい出来だと自分で納得のいくタッチで空間を埋めていく、となると次の絵でもまたもや同じ赤い絵の具を絞り出してパレットに並べている、ソット赤い色を入れ、ザックリ赤い色を塗る、これが又うまくいく、絵が生き生きしてきていると悦に入る、と又赤い絵の具を出している、赤い色でこする、赤い色で刷くという事になるわけです。こんな事が1年2年続いて次に徐々に例えば黄色い絵例えば青い絵の時代に移行していきます、というような事が、オレの絵画生活における色の流行の話です。

このように説明するとピカソ大先生の“〇〇時代”“ようですが、同じよう違うような・・・。ピカソと言う人は絵のスタイルがいくつかあって、ピカソのあの時代の絵が好きだ、この時代の絵が好きだ、と色を使い分けた時代のことを人からよく言われている。青の時代、キュービズムの時代、野獣派の時代、次は何がありましたかな、とにかくオレは彼の晩年の描きなぐり、色の綺麗なものが好きですねえ。ピカソと言う人は前世紀の絵画の世界のモンスター、没後何年経っても人気も価値も値段も衰えを知らない、すごいですねえ。

普通に今の日本では流行と言え、婦人服の話が一番多いのでは。男も女の人に比べたら緩やかだろうけれども、男の服装も流行があり、チトこれは古臭いかな、これは格好が悪いかなとオレなりに気を使い見回している様が可笑しい。女性の場合は「これは去年のだよ、今年のトレンドはこれ」というふうに1年ごとに流行が走り去り次から次に服装に、服装の廻りの諸々に流行を取り入れお洒落が走り去っていく。なんでこんなにコロコロ変わるのだ、と思ってもするが、次から次に走り変わっていく様はそれなりのおもしろい、それなりに楽しい。昔デザインをやっている友人がTVのコマーシャルが面白くて楽しくてと言っていたのを聞いて、何処が面白い何が楽しいと思ったけれども、なんでもかんでも1カ月2カ月と古臭くなる様はそれなりにおもしろいかも。

どんどん変わっていく、変わっていく物が、変わっていく事がなんだか新しいとても素晴らしいと錯覚して日々追いかける。現代社会の在りようだとすると、たゆたゆと一生を変わず暮らすのは至難の業。本当はそれが本当なんだけどねえと、なぞなぞのようなぼやき。

図版はあれだけ苦労したのにスイット出来あがった、白の時代か・・・。

友人の内科医が「もう勘弁してほしい、毎回うんこの事を訴えられて・・・」「うんこの硬い軟らかいは病気と違いますよと言っても聞いてくれない・・・」とぼやいていた。オレも30歳代の頃別の友人の内科医に「下痢が続いて・・・」と診てもらいに行くと「神経じゃ」と笑いながら薬をくれた。考えればうんこの事で深刻になって医者を訪ねるとは失礼な事をしたものだ。

尾籠な話で「お前のうんこの話など聞けるものか」というご仁はこれを閉じて下さって結構ですぞ、と言いながら自分自身のうんこの話を事細かく語るの初めてのこと、そういえば今まで自身のうんこ、色やら形やら、回数やら時間やら、ズボンの降ろし方やらその姿勢やらを細かく人に語った事も無ければ、会話の中で人から聞かされた事も無い。「ちょっと“あげくだし”が続いて・・・」「便秘で・・・」と女の人「下痢が続いてトイレが無くて困った」「放屁のつもりがうんこが出てしまった」と男の人、とそんな風に面白い話やら失敗談は聞く事もあるけれど。

昨日までの4日間信州八ヶ岳に入って、1回“きじうち”をした。“きじうち”とは山の中でうんこをすること、野糞をする山屋さんの隠語で、女性は“お花摘み”とのたまう。何故そういうかうんこをするスタイルが雉を撃つ姿に似ているとかだそうだ。戦国時代、敵のきじうちスタイルを見ておもしろがって尻を弓で射ぬいたとか、これを聞くと実に痛そうで笑ってもいられない。

今まで何度も山に登って何度もきじうちをしてきた。とはいえ、きじうちの話、うんこの話をするのは初めて、体面的にも衛生的にも環境にも問題がある行為だけれども、出物腫れ物処嫌わずなので申し訳ありませんが許して下さい。その時は一人で行動していて、人っ子一人いない山の中、腹がグルグル鳴って来て、これはすぐにでるぞという兆し、登山道から少し上に格好の岩かげを見つけ登山靴を蹴飛ばして穴を掘る、ポケットのトイレットペーパーを確認する、左右を見て人がいないのを再確認、ズボンとパンツを一気に下げると同時に身体もしゃがむ、ぐるぐるの軟便はぐるぐる出る、ペーパーでスイと2回拭う、地面からいささかくさい臭いが立ち込める、さっと立ってさっとパンツとズボンを上げる、シャツを降ろし服装完了、靴で土を被せる、指を土に擦りつけて手洗いの代わり、「いやあセーフ」身体がすっとして快感である。

*注意することは、紙はトイレットペーパーに限る、ティシュペーパーは溶けにくいので。

*都会やら河川敷で見かけるが、排便の上にティシュペーパーを被せているご仁はいけませんぞ。

*川の傍での排便は川を汚すから避けましょう

去年ぐらいから便秘を知った、ずっとずっと子ども時代から軟便で毎日排便には事欠かなかった、腹を出して寝て朝になると腹がグルグル、腹が渋るのは毎度のこと、そんなオレのうんこが最近硬くなってきて、排便の無い日が出てきた。そうすると毎日排便がある、少々渋っても出るのは快適だと日々思う。

少し前に3人4人の男女がアトリエにやって来て軽くビールを飲んでいる時に、某女が「ちょっと」と手招きするのでトイレの方に行くと、便器の水が溢れトイレの床も水浸し、階下に漏れたら大変とアトリエ備え付けのぼろ布を取って来てまずは階下への水漏れは無くなったが、なかなか水は引かない。このトイレができて40年初めての惨事、彼女スポーツの汗をトイレットペーパーで拭いたとか。「ポンプを取ってくる、それで簡単に直るよ」と男の人が走ってくれた。ゴム製のポンプでボコボコすると水がボコボコ流れ事なきを得た。ところがである、数日後オレが二日分のうんこをそれこそウンウンいいながら脱糞して水を流すと水が溢れそうになっても流れない「あれれ・・・」と困ったが、1時間経ち2時間経ち何度目かの水でボコボコ流れてくれた。助かったと思ったが、数日後すぐにまたそうだった。ポリ袋を手袋代わりの割りばしを持って水の中便器の奥に手を突っ込んで掻き回すとボコボコ流れた。何回もそうなるとう慣れてきて時間がたてがそのうち流れると悠然と構えているが来客があるとちょっと困る。今日はうんこが大量にでるぞという時には水を流しながらするのもよし、とにかく立派なうんこ大量のうんこが出るのは気持ちがいいし快感快調だけれども便器が詰まるのはいただけませんね。

そちらのお兄さん、こちらのお姉さん、貴方のうんこ事情を聞かせていただけませんか。

昨夜は眠れず夜中にウトウト目覚め 5 回の尿意にテントのジッパーを開け登山靴を履いて雪の中を出て行って小便をしたおかげで翌日の体調は最悪「こんなことではいかん、元気が出ない、寝不足は大敵、眠るためには暖かく着こまねば・・・」靴下を新しいものに変えカイロを貼りもう一枚靴下を履き、タイツも 2 枚重ね、長そでシャツを 2 枚追加、外はしんしんと雪が降り始め気温が下がってきている。テント場は一人 625 円、板がある所はプラス 900 円と聞いたがこのテントは大き過ぎて板には乗らないので雪の上にテントを張った。マットを敷いても背中から雪の冷たさ、朝にはペットボトルの水が半分凍っていた。男 3 人のテントの中、野菜を水で煮てポン酢で食べるという単純なそれだけという料理ながらこれはこれでなかなか旨い。ネギ、白菜、大根、キノコをぐつぐつ煮て、椀のポン酢にさっと浸ける、ビールを飲む、ワインを飲む、日本酒を飲む、身体がポカポカ温まってくる「今夜はぐっすり眠るぞ、明日はしっかり歩くぞ、明日は何処に行こう・・・」「明日はあっちに行ってみようか」「あちは一度も行った事が無いけれども最終日だから・・・」会話が弾んだが「これで終わり寝よう、明日はあっち」とシラフのジッパーを閉じた。朝の 6 時までほとんど目覚めることも無く、体調のよさそうな朝を迎えた。「ダウンの上着使わないなら貸して」と着込んだ澤山さんが「寒くて寒くて眠れなかった、体調が今ひとつ」という。

ポカポカ陽気、まっすぐに立つ針葉樹、真っ白な雪の世界に池が見えてきた。テントを張った傍の池は人が乗っても割れないほど分厚い氷が張っていたが、こちらの池は蒼く碧に紺碧に鈍っている、恐らく雪の白さがオレの目を錯覚させているのかもしれない、雪が無く草原の中の池なら水は青く緑に見えたかもしれない。

雪の積もったなだらかな台地から一人帰った衣川さんが「迷った、帰り路が分からなくなって、こんな所で遭難なんて洒落にもならない」と笑っていたが雪が硬く固まった平原は足跡、踏み跡が付きにくく目印標識が無かったらぐるりと一回転したら右も左もわかりにくい。

「それじゃちょっと登ってくるよ」林道と思われる所を少しずつ歩き始めた。標識の頭が出ている処があるので積雪は背丈ぐらいいかな。ポツリと人、また人、下って来る人 5, 6 人に出合った。「登り口はもうすぐですよ」と楽しそうな男女がアイゼンを着けて下ってきた。今日はアイゼンを持ってこなかった、昨日は少しの間アイゼンを着けたけれど、今日は多分アイゼンは要らないだろうと置いてきた。「なるべくアイゼンを着けないで靴だけで歩くように」と澤山さんにいわれる、「ズボ足」という言葉も最近知った、靴だけで歩く、アイゼンも輪環も着けないで靴だけで歩くという意味だそう。今日は登りも下りもズボ足で通した、登る時は斜面に蹴り込むとずるりと後に滑らない、下る時は踵に体重をかけ次の足も踵でと斜面を下る、一度も転けなかった慌てなかった。

この話で思い出すのが 2.3 年前の GW に行った毛勝山、雪の斜面をオッチラ登った又登った、上に行くほど斜度がきつくなる「下りは怖いな」と思いつつ陽の光で雪が少し柔らかくなって「まあ、大丈夫か」とも気休めつつなんとかてっぺんに着いた。帰りは尾根を降りようと言っていたが尾根道が雪に埋もれて見当たらない、「元来た所を降りよう、ザイルで結びますよ」と澤山さん、初めての経験ながらザイルを巻いてもらって下り始めた。人は現金なものだの見本通り、ザイルで確保されている後で引っ張ってくれている大丈夫だという気持ちが身体の動きに余裕が出て恐くない、スイスイ下れる、右足左足と雪の斜面を下りた。「もうはずしてもいい」「もう少し」と斜度が緩やかな所まで、その後もスイスイ降りて、片貝山荘まで帰った。恐怖とは想像のするから怖い、落ちる事を想像する、滑って止まらない事を想像する、そうすると身体がこわばって手足、四肢の動きがぎこちなくなる、体力が消耗すると悪循環の典型がやってくる。恐がりのオレなりのコワガリ理論である。

今日歩いたのは、麦草峠の駐車場から、雨池、縞枯山、茶臼山、駐車場のコース。「歳をとったら来ようと思っていたけれど、やっと初めて北八ヶ岳のこっち側に来た。綺麗でいい所だ」と澤山さん、オレも同感。穏やかで緩やかで距離も短い、山ガールもたくさんいた、アルプスを登って遭難騒ぎの渦中にある山屋さん達には頼り無い山かもしれないが、65 歳、70 歳という歳になったらここはいい、綺麗な山だ。

小林・益川理論の証明<立花隆：著> を読んで物理・科学の門外漢のオレが「おもしろいもつと読みたい」と図書館の書架を探している時“立花隆・無知蒙昧”という文字が目に入ったのでその本を借りて帰った。立花先生“小林・益川理論の証明”の中で、NHKの科学担当のデレクターと雖も“小林・益川理論”の中味は全然わかっていない、ノーベル賞という賞だけの事とか、益川先生の話は面白い小林先生はだめだとか、次のノーベル賞の予想は日本人はダレとダレというような低俗な事ばかりに興味を持っているが、小林・益川理論とは何か、その中に書かれている現代の物理、宇宙にはこんな事があるのではと書かれた論文、そこに書かれた理論を実験で証明しようと何年もかかっている現代物理の壮大な実験の事はわかっていない、彼らは現代の物理の世界という事では無知蒙昧である、というようなことを書いていた。この本を手にとった時は、またまた立花先生が科学のことを知らないマスメディア関係の権威の方々を扱き下ろす話と思ったが、ページをめくってオレ自身の無知蒙昧に笑ってしまった。今回の本を読み始めてびっくり、著者は京都大学の先生で、有名な立花隆がわかった様な、わかっていない様な、科学の話の本に書き、立花隆が有名であるが故にたくさんの世間の皆さんに読まれているが、中味がおかしい、科学の事で間違っただけ、間違っただけ、間違っただけ、これを正さねば、こんな嘘を尤もらしく本にされたら科学が誤解されてしまう、立花隆の無知蒙昧を正さねば、摘発しなければという趣旨の本のようだ。京都大学の先生「立花隆め、お前こそ知りもしないで勝手な事を書いて本にしてたくさん売って、お前こそ無知蒙昧だ」という生臭い話、大先生の勝ち誇った顔、大先生の生臭い話は興味が無いが、大先生の本の中味は素人にもわかるように書いてくれているので楽しく拝見中、ただ本の中に度々出てくる「立花隆はこの事だけは知っているようだ」「立花隆は此処が間違っている」というフレーズはイタガユイが、ひとつだけ紹介します。

立花隆の無知蒙昧を衝く<佐藤進：著>

<立花隆はスターリンクのような遺伝子組み換え食品（GMF）が現実のアレルギーの危険をもたらし、日本政府もアメリカに輸出しないように要請している事実にもなお「私は遺伝子組み換え食品（GMF）になんと心配もしていない、売ったら平気で買うし、出されたら平気で食べる」という発言を撤回しないのであろうか>

遺伝子、遺伝子組み換え、という言葉は知っていたが中味は知らなかった、まして何がよくて何が悪い、と全く無知だったけれど少しだけだわかった。若い頃に遺伝子の設計図だとか遺伝子そのものをコンピューターで計算して説明しつつあるとか、高等生物の最高峰“人間様”とそこら辺を這いつくばっている動物と遺伝子の形はそう変わらない、なんと驚きでがっかりする話だ、なんて聞いたことがある。恐らくそんな事はもう昔に解明されて、今は遺伝子を操作して病気の治療、食料になる植物の改造に取り組んでいるとか。遺伝子の組み換えを行って人間の病気治療に利用しようという研究が進んで、同じ作業なので、遺伝子組み換え食品（植物）の研究が進んだ。<耐害虫性>害虫が付かない植物、<耐除草剤性>農薬を散布しても農薬に強い植物が開発された。例えば今までの害虫被害がすごかったトウモロコシに遺伝子組み換えをすることで害虫が寄ってこなくなったとか、除草剤を散布したら肝心のトウモロコシまで枯れてしまったが、除草剤に平気なトウモロコシができた。考えてみればこれは夢のような話、こんなトウモロコシがあれば最高と農家の人は欲しがると、アメリカではどんどん栽培され、どんどん食べられているようだが、ちょっと待ったと先生はいう。

本は途中ですが、遺伝子の話、無神論者のオレが“神の領域”というのもおかしいけれど、そこはふれるな、触るなという倫理上の許されない領域なのだという人も多い。治療という大命題、そこに遺伝子の改造、再生、臓器移植と喧しい大問題が起こっている。

オレが居て、反オレが居るとゾクゾク嬉しくなる話、オレが居て、次々同じオレが生まれ出るとゾクゾク気持ちの悪い話。

この嬉しくなる話はどんどん聞きたい、物質と反物質の存在なんて混沌とした話、大金がかかるそうだけれどもどんどんやって欲しい。この気持ちの悪い話が科学の操作によって簡単にできる、意のままになる遺伝子操作の話、これがいいことなのか、そうでないのか、今はわからない、判断がつかない。

5月の初め、標高2000メートルひょっとすると峠を越える道はまだまだ雪があるかもと、そんな懸念は吹っ飛んで道路にも駐車場にも雪のかけらもない。ところが登山道をちょっと行くと踏み固められた雪で滑りそう、気を入れて歩かねばひっくり返りそうである。10分も行くと白駒池、此処が今回のテント場、3泊の長逗留、池はまだまだ凍って真っ白なデコボコ、長い冬の間の積雪、吹雪、風が、平らな池の表面をこんなふうに変形させてしまったのか。晩飯前の一瞬外でじっと立っていると手袋が欲しいというぐらいに冷えてきた、吹いてくる風が冷たい、小雪も舞い始めた。

コック長が豚汁を作ると材料を物色、大根半分、人参、蒟蒻、ウスアゲ、キノコを並べ、まな板、包丁を用意、まずは大根の皮を皮むき器スルスルスリと剥き、ゴミ袋に、次に人参の皮むきを同じようにする。大根を縦方向に四つに割りそれを5ミリぐらいの厚さに切っていく。「これがイチョウ、銀杏の葉っぱのようでしょう」なるほど銀杏の葉っぱの形だ丁寧に切りますねえ。人参は縦に半分に割ってやはり5ミリぐらいの厚み、この半円形は何のいうのでしょうか。さてコンロに鍋をかけ水をたっぷり入れる。山では水は貴重品、大きなペットボトルを4本運んで来たので6リットルは在る、まずは明日の朝までは大丈夫だろう。鍋に大根、人参を入れ化学調味料をいれる。「この蒟蒻は下茹でしなくてもいい物、普通は蒟蒻を少し茹でて臭みを抜くんだ」へええ、それは知らなかったと感心する。ゆっくりぐつぐつ煮えてきた「大根ニンジンが柔らかく煮込んできたら豚肉を入れて丁寧に灰汁抜き、これをしないとまずいんだ」灰汁抜きはいいことだけどテントの中での灰汁抜きは、お玉ですくった灰汁を棄てるのにテントのジッパーを開けなければいけないという邪魔臭い作業があった。お玉にみそを入れ鍋の中でクニクニ「豚汁には味噌と、酒粕を少々入れるのがミソなのだ、ぐんと旨くなる」「普通の茶色い味噌は大豆が主原料なのだ、京都で有名な白味噌は米が原料、味噌はたんぱく質、米は炭水化物と原料が違うのだ」なるほど白味噌は米から作るのか、それは知らなかった。「味はどう」「もう少し味噌」「もっと味噌」と何度か追加して関東風の味になったがなかなか旨い。ビールをグビリ、豚汁をグビリ、次に日本酒をグビリ、豚汁をグビリ「ああ暖かい」と雪の上の晩餐会は時間が過ぎていった。

5月の中旬の先日は5人で比良山、「久しぶりの山なので歩けるかどうか」という人が二人もいるので、「今回はイン谷口でテントを張って荷物をデポ、金糞峠に向かって歩くが一人でも白旗を掲げる人が居たらみんなで引き返してテントで反省会をいたしましょう」「行けそうなら、金糞峠から湿原を抜け、北比良峠からイン谷口まで一周しましょう」というのが今回のルート、Yさんがかなり危なっかしい歩き方だけれども休憩を何度も取って、甘いものを何度も取って「なんとなく行けそう」とあれよあれよと金糞峠。「今日は中華鍋だけど、あれれ、ひょっとしたら、麺を入れ忘れたかも」と今回のコック長、Nさんが困った顔をしている「野菜があればいいよ」「肉があればいいよ」「麺より肉が無い方が悲惨、麺が無くても大丈夫だよ」と慰めるがNさんますます不安顔。「イテテ、足が攣った」とGさん。「岡村さん水をください、スポーツドリンクの粉末をドロドロに溶かして飲むとずっと治りますので」とひと息に飲みウソの様にしたらしい。「筋肉がついたら塩分です、スポーツドリンクは最適です、梅干もいいです」これは知らなかった、オレもめったに足が攣った経験はなかったが先日膝上の内側が攣りかけた事があった、年なのか弱ってきたのか、いずれにしてもいい治療法を教えてもらった。

「先にテントに行って湯を沸かしておきます」とテントに着いてコンロを出し、鍋を出し、水を入れて火を点けた。ワイン3本を水の流れに入れ冷やす。10分ぐらいで全員到着、Yさんはぺたりと座って「もう動けない」とホンワカ山を満喫、Gさん「この疲れで飲むとよくないので今日は飲まない」と同じようにぺたりと座ってホンワカ山を満喫、元気なAさん楽しそう、普段飲まない人がグビリ又グビリ。コック長「やはり麺を忘れてきた、保冷バックに入るか試しに入れてみてそれを又冷蔵庫に戻した、なのに今朝、保冷バックに入れ忘れた、皆さんゴメン」「大丈夫、野菜と肉で腹がいっぱいになるから」とワインを1本水の流れからとって来て皆さんのカップに「今日のご苦労様でした、無事予定完結、乾杯」と杯を空ける。この日の野菜はもう切つてあるのでネギ、青菜、キノコ、豚、どんどん入れ、中華スープの素を入れ、杯を空け、グラグラ来たら「さあ皆さん椀を」と野菜を食べる、肉を食べる、ワインを注ぐ。山で食べるメシな旨い、山で飲む酒は旨い。

図版はキャンバス地で前かけを作り絵を描いた。これをして料理をして下さい。

梔子（支子とも書く）色とは、RGBで251・202・77、CMYKで0・20・69・2と出ている数字がまちまちでもある。いい香りの梔子の白い花、その実を使った古代からの黄色い植物染料。梔子色とは、梔子で染めた黄色に紅花の赤をわずかに重ね染めした色。梔子のみで染めた黄色は黄梔子（きくちなし）と区別されている。梔子は古来からアジア原産だが、紅花はエジプト原産で日本には5.6世紀シルクロードを経て渡来。紅花が渡来植物だったとは驚き、平安時代の赤い布は、日本に入って来てすでに100年200年と盛んに育てられ、使われていたんだね。

アメリカ在住の河合さんが、絵（オレ作）の額を作ったけれどどちらがいい？と写真を送ってくれた。＜黒枠に黒スリット（隙間）＞＜白木に黒スリット＞＜白木にクチナシ色のスリット＞福知さんは「黒がいい」オレは我然白木にクチナシと思った、あまく上品で飽きが来ない、黒はきついなと思った。水彩画の額は若い頃から色々試して入れた、枠自体は細いので黒も白も金も銀もよく合っているが、中のマット（厚紙の枠）は幅広で白の近い象牙、クリーム、ベージュ等を好んで選んでいる、今回の梔子色もいいなと思った。だけれどもそもそも梔子色がどんな色かは知らなかった、黄色よりやや薄くやや渋いと思っていた。「黄袋の色だよ」「黄袋？」黄袋とは、額に入った絵を扱う人なら知っている、普通は絵を額に入れ、額を黄色い布製袋もしくはビニール袋に入れ、厚紙製の箱に入れる。この黄袋本来は虫除けのためウコンで染めていたらしいが、今はその名残で黄色いだけだという。余談だけれど箱もあわせ箱（かぶせ式）、差し箱（上から差し込む）、たとう箱（箱の上から布を貼ってある）と順次上等になっていく。

梔子色が、黄色、日本的なやや薄い黄色、ほんの少し赤みを帯びているという事がわかったが、オレは別の事を考えていました。別の事といっても色の話、梔子色も含めての話ですが。毎日使っている絵具、それをパレット代わりの皿に取り筆でかき混ぜると粘度の高いネトリとした感触、これを紙の上に塗ると厚みのある絵の具が盛り上がる。溶剤の液を混ぜるとサラツとなり、もっと液を入れると更にシャブシャブになる。同じ絵の具でも溶液の多さによって色が違う、この色の違いを上手く使っていく、この違いが面白い、この違いは同じ色ながら全く別の表情を表す、この違いを言いたいのです。ネトリした絵の具、筆から滴り落ちる絵の具、同じ絵の具でも様々な色を見せてくれる。白い紙に乗った時の色、白い紙に沁み込んだ時の色、別の色が乗っている処にその色に乗せた時の色、と同じ絵の具でも10も20も色の違いを見せてくれる、これがいい、これを使いこなせたら描く世界がもっと開ける、楽しく描ける、もうそんな事を言い始めるとオレだけの世界、皆様にはわからない話、わかってもらえない話ですが、オレも次の一手はどちらでいこうか、それともこちらでいこうかと思案に思案を重ね、躊躇逡巡の時が続くのです。

〇〇色というと、ひとつの色、ひとつの絵の具ですが、色々な場面を想定して、色々な事が錯綜して、皆様が言う処の「黄色だ」「緑色だ」がオレにはわからなくなって来ているのかも知れません。「黄色といってもどんな黄色、沁み込んだ色何だろうか、たっぷり乗っているのだろうか、擦れているのだろうか、フィルムのように透明かな、下の色を塗り込めるぐらいに強いのか・・・」とオレの脳の中で巡り巡っているのです。おかしいですねえ、バカですねえ、もっと素直になった方がいいですねえ。

日々使っている絵具の黄色は3色ぐらいです、単純なものです、レモン色、薄い黄色、濃い黄色だけです、愛おしいですねえ、オレが“イトオシイ”などという気持ちが悪いですねえ。

色を数字で表すのに“カラーチャート”という物があって、数字を入れると色がすぐにわかりますが、此処でいう色は紙にねっとりたっぷり塗った時の色です。それでもこれがあると参考になります、助かります。

最近、お気に入りの色の話、若い頃は無かったがUSAの絵の具“ニッケル・アゾ・イエロー”見た目は“イエローオーカー”ですが白と混ぜると不思議なクリーム色、不思議な爽やかさが気に入っています。

「日本人は1950年代まで、まだまだ飢えていた」「1930年代日本では最後といわれるが、東北地方で大きな飢饉があった」「今も東アフリカ・ソマリアで飢饉のため25万人が無くなっている」

水上勉著<良寛のすべて>の中で著者が「越佐草民宝鑑」を紹介している。江戸期、越後の農事情が書かれている。その中の一人の主人公、弥三郎は良寛と同年生まれ、良寛の生地に遠からぬ柿崎の地で米騒動に連座して佐渡遠島となり48歳で許され帰国したが数年後に亡くなった。天明の大飢饉の真っ最中に生きた水呑み百姓と代官の息子に生まれ出家した良寛、違った人生を歩んだ二人の時を追って、著者の感想が入りおもしろく読んだ、ひょっとしたら著者が小説にしているのかも知れないが・・。

宝鑑より<>印は著者の感想：水呑弥三郎は生涯蓑傘（さりゅう）の人なりき。<良寛も弥三郎も脱俗、名利一切を棄て風食水宿の禅生活、一蓑一傘だったと思う>幼時より無常心在り、才智優れ海上上人より漢字を学び、出家を願ったが法度は不許となった。<当時の水呑み百姓は、逃散はもとより出家さえ許されなかった。百姓は出家するには五人組の連判と代官所の許可が要った。人手の足りない百姓仕事では出家など誰も許さなかった。>我は生涯水呑、荷夫にて我が道来たれり、出家して学智を求むる程に道は遠くなるなり、とむはべりき。農事、漁業に勤しむ。

九年に渡る大飢饉で農民の困窮極まり、米価上騰、餓死者が巷に溢れ、漁師重佐衛門、善三郎、水呑籐左衛門、弥三郎ら数名が中心となり、米価高騰は大地主と酒蔵業者の買い占めと貯蔵が因なりと曲解をなし、一揆総勢400余人で、**素封家を襲い放火暴動した。出雲崎代官所は主導者を逮捕、重佐衛門を磔刑、善三郎と弥三郎を佐渡に、4名を八丈島に。**弥三郎は佐渡金山の水替人足を20年間勤め帰郷したが、生家、妻子はなく本人もよろけ（鉱山塵肺の病）片目盲、諸村を放浪乞食の後母兄弟の眠る墓で、立ったまま亡くなった。

弥三郎が一揆に加担したのは詮無き理なりき。首謀者の重佐衛門、善三郎らは、富裕者、米屋、質屋、酒蔵者が買い占めた米の放出願い出ると、書をよくしたる弥三郎を首謀者に加えた。前年冬より暮らしは困窮なり、妻子は骨と皮に痩せお上の施粥が無ければ、一家路頭に死骸を曝さん。

良寛が18歳で生家近くの寺で出家、22歳の時傑僧で名の聞こえた国仙和尚に従って岡山の円通寺に行った。この歳弥三郎は18歳、かねを嫁に貰ったと宝鑑は記している。弥三郎一家は水呑みなので持ち田は無い。地主の小作田を守り、労賃代わりに、扶持米をもらい、暇があれば荷夫に出て港で働く毎日であった。

弥三郎帰国せしは・・赦免船で出雲崎港・・生家に戻りしが家屋は破れはて、廃屋なりき。かね、弥吉はいずこ・・。村人来たりてその風貌の変わり果てたるよろけ顔なるに驚き気づかざりしも、時が経って暫く素姓わかりしかば、人々集まり来たりていふ。逮捕されたほとんどが消息不明という事、かねはよそに嫁した事、弥吉はいずこかわからない事を聞く。妻の他家に入りて幸せなれば、親様の慈愛なり、ただ子の行方など尋ねたいだけ、親様は妻に本来の幸せを与えたる心なり。村人それを聞いて袖をぬらさぬ者なかりしとぞ。なれど流罪人を泊めおく事をこころよろこばざりき。弥三郎よろけ足を引きずり、村人のくれた蓑傘をつけいずこかへ。その後かね女の嫁ぎ先の近くをさまよい、かね女の幸せを見、飢饉の年に子が亡くなった事を知る。昼は乞食、作男、夜は経文を読んでいた。六十がらみの両眼患いたる乞食墓地で亡くなっていた。頬こけ、肉おちたる形相は、白骨そのまま歩き来しかと思われけるが、人相の変わり果てたる弥三郎とわかりし時は、村人こぞりて泣きあいぬ。信仰深き弥三郎の生涯だった。

昔の記録にこのように個人の人生を物語風に、人情味豊かに記したものと知らなかった。英雄豪傑ならいざ知らず、流人、無宿人、犯罪者の記録があれば読んでみたい。